袈裟懸(掛)の松と御松庵 妙 福寺

名勝洗足池公園-④

所在地：妙福寺　南千束２-２-７

交通アクセス：東急池上線洗足池駅から徒歩２分

公開の有無：公開　５時～17時

袈裟懸(掛)の松

『名所江戸百景』「千束の池袈裟懸松」(大田区立郷土博物館蔵)

妙福寺祖師堂（旧七面大明神堂）

洗足池はかつて「千束郷の大池」と呼ばれていました。それが今の名前となったのは、日蓮宗の開祖である日蓮が池畔で手足を洗った、という伝承にちなむといわれています。

日蓮は晩年、胃腸の病気に悩まされており、弘安５年（1282）、甲斐国（現在の山梨県）身延山から常陸国（現在の茨城県）に湯治に行く途中、信者である池上宗仲の館（現在の池上本門寺付近）に立ち寄る際、洗足池にたどり着きました。そこで、袈裟を松にかけて手足を洗ったところ、法華経を守護する七面天女が現れ、日蓮の道中を守護してきたことを伝えたといわれています。洗足池の南東にある御松庵（現在の星頂山妙福寺）は、後世この出来事を記念し、当地の人々がお堂を建てて七面天女像を安置し、さらに松を守る護松堂を建てたことがはじまりという言い伝えもあります。

洗足池の畔に昔から松が植わっていたことは確かなようで、江戸時代の浮世絵師、初代歌川広重の『名所江戸百景』のなかでは「千束の池袈裟懸松」、江戸近郊の地誌である『江戸名所図会』には「千束池袈裟掛松」として描かれました。現在でも妙福寺には、その風景を想像させる松が植わっており、名勝としての歴史的な景観を構成しています。

妙福寺は、もともと台東区浅草にありましたが、昭和２年（1927）に当地に移転し、御松庵と合併して今に至ります。本堂である祖師堂（旧七面大明神堂）は国の登録有形文化財で、正面の水引虹梁（直上の木枠の部分）には日蓮の袈裟と洗足池の水面が彫刻されています。平成16年（2002）の保存修理に関わる調査で、明治時代中期に建築されたことが判明しました。